

令和 2 年 9 月 13 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02285

研究課題名(和文) 感覚のアーキペラゴ：脱(健常)の芸術とその記録法

研究課題名(英文) Archipelago of senses: diversity and the arts of engagement

研究代表者

高橋 悟(satoru, takahasshi)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：30515515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ヒトとヒト、ヒトと環境の相互行為から障害者の創造行為を捉え直す事を目指した本研究では、環境から集団への働きかけ 個人のコトバからコミュニティへ、という2つのベクトルが交差する場として、協同的なパフォーマンスを展開した。鑑賞者と演者を区切る劇場など従来の公演手法ではなく、障害者支援施設の空間全体を音響、照明、鏡面、映像を用いて多面的に使用し「観る・観られる」「見る・看られる」という境界を越境する試みである。また、その成果を学会で発表するだけでなく、家族や当事者と共有できるフィードバックの場を準備することで今後の展開の基盤となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ケアのフィールドへ越境すると同時に、障害施設のメンバーたちがアートのフィールドへと越境するという相互的な方法で場が形成されるモデルを構築することができた。環境から集団の身体へ働きかける「外からのベクトル」、個のコトバからコミュニティへという「内からのベクトル」、これら二つが交差する場としてパフォーマンスを開催し、障害者施設の空間全体を音響+照明+鏡面のインスタレーション+映像を用いて多面的に使用し、「観る/観られる」、「見る/看られる」という境界を越境する協同的な場をカタチにする事ができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to reexamine the meaning of the creative practice of disabled persons, specifically the interaction between humans, and between humans and the environment. In this research, performances based on multiple workshops and video screenings as art documentation were held in environments where persons with disabilities work, rather than museums or galleries. This is an attempt to create a cooperative place that crosses the boundary of "observer/observed" and "cared for/care giver". In addition, the results were not only presented at academic conferences, but a forum was also established to share the results with the parties concerned and their families, and the feedback was used as a basis for future development.

研究分野：現代アート

キーワード：相互行為 アフォーダンス 環境 障害 美術館 ケア アーカイブ 集団

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

アートとケアについて、身体や個の表現からでなく、集団やコミュニケーションの視点から接近する事に重点を置いた。ひとりよがりのアートが、自律や健常への方角づけではなく、共に居ることを仕事とする「ケア」と出会うことで、「アートは誰のものか？」という不可避の問いを経て「生きたアート」の探求へと発展することを期待しての事である。さらにまた、アートという不可解な謎が、ケアの仕事にたずさわる方々に、「もう一つ」の迂回方法を提示する可能性を探っていた。

### 2. 研究の目的

本研究は障害というコトバを割り当てられた創造行為について、健常者を中心に構築されてきた知覚・表現論理や個人・表現・受容者を前提とした従来の芸術論による評価とは異なる視点からのアプローチを目指したものである。そのため作品という完結したモノの分析からではなく、モノ、集団、環境など活動の現場での相互行為や創作のプロセスに着目した分析を行い、知覚・情動など当事者の内的環境における出来事が、道具や他者、空間など外的環境を含む「分散したネットワーク」から生まれることを明らかにし、当事者の不安定な生の文脈へと接続された多感的な記録と関係的な領野の記述を含む「創作」としての新たな提示方法の構築を目指した。

### 3. 研究の方法

障害者支援施設での創作活動の現場での実践的フィールドワークを軸に、サポートスタッフ、家族、アーティスト、当事者による共同パフォーマンスに実践を進めた。さらにそのプロセスをドキュメンタリー的手法による記録としてではなく撮影や編集のプロセス事態に当事者や家族も巻き込んだアートドキュメンテーションとして提示する方法を考案した。

### 4. 研究成果

ヒトとヒト、ヒトと環境の相互行為から創造行為を誘発することを目指した本研究では、複数のワークショップを踏まえたパフォーマンスや、アートドキュメンテーションとしての映像上映会を美術館やギャラリーではなく、障害者が働く現場の環境を組み替えて開催した。また、その成果を学会で発表するだけでなく当事者やその家族と共有する場を設定しフィードバックを元にして今後の展開の基盤とすることができた。

①「生きたコトバ」をテーマにしたワークショップを踏まえたもので、異なる感性、思考、リズムを持つ人達による「新しいコミュニケーション」の実験的な記録映画の作成と、その成果発表をライブ形式で行った。主役は、安田真隆、水田篤記という18才と20才の若者である。安田くんは強度のアスペルガーで普段は他者とのコミュニケーションを取る事はなく自己の世界の中で、イラストレーションや物語を創造している。またインターネットの動画をダウンロードして、彼が気に入ったほんの数秒のシーンを繰り返し、繰り返し、とてつもない速度でタブレット端末を操作し続ける。安田くんの頭の中には、無数の動画のストックがあり、それを即座に取り出しながら Re-Mix している姿は、音楽の DJ に例えるなら、VJ と呼んでもよい。一方の水田くんは、小児麻痺で手足と発語に障害がある。柔和で明晰な好青年であるが、彼の心の中の速度と、現実アウトプットできる速度には大きなギャップがある。「昇天」「憂鬱」「人は進むがすぐ老いる動物である」など、優しい水田くんの表情からは思いもよらない激しく暗いコトバを描いた絵画を制作している。その制作手法も独特で、まずマーカーで文字を描き、それに蠟を塗り、墨で塗りつぶしてから、改めて文字をナイフで掘り起こすという作業である。ワークショップでは、安田くん、水田くんと時間を共に過ごし彼らとのコ



コミュニケーションを図った。ここでのコミュニケーションとは、ミスコミュニケーション、ディスプレイコミュニケーション、対立、放置をも含んだ集団行為である。着地点を設けず、試行錯誤を続けながらも、参加メンバーの間には、安田くん、水田くんが主役となれる場さえできれば、失敗も成功もなく、それで良いという意識が芽生えた。17日の発表の当日は、安田くんは天井の高いホールの空間が怖くなり、水田くんは観客の数に圧倒されて泣き出しそう。このような場に彼らを無理に引きずり出した責任を痛感しながらの開演となった。予想もしない結果に驚嘆したのは、かつて他者とのコミュニケーションを全くとらなかった安田くんが、観客に指揮を与えながらパフォーマンスを行い、いまにも逃げ出したような水田くんが、予定した時間をはるかに超えた即興演奏を披露した事だ。いま振り返ってみると、障害というコトバにとらわれ、そのボーダーの手前で他者を規定していたのは我々のほうであり、安田くんも、水田くんも、そのようなボーダーを軽々と超えていたのである。



②「接触」をテーマにした実験的な身体ワークショップから始めた。通常のワークショップのように参加者を募り、決められた時間の枠内で進めるのではないのがその特徴だ。障害支援施設のメンバーたちが仕事をしている現場に仮設ブランコを設置する、突発的に体がぶつかり合うアクションを仕掛けるなど、驚きに満ちた作業が、静かな日常のルーティン作業と同時に進行してゆく。センターのメンバーたちは、仕事の手を休めることなく状況を淡々と眺めたり、作業の合間に不意に介入してきたりすることで、少しずつワークショップに「参与」していくというかたちが取られた。ここでの重要なポイントは、ケアのフィールドへ越境すると同時に、メンバーたちがアートのフィールドへと越境するという相互的な方法で場が形成されていった事だ。舞台作品での演出家と演者のような関係から離れて「やりたければやればいい、やりたくなければそれもいい」というスタンス。そこから、共感、対立、離脱、放置が共存する、そのような独特の「距離の演出」の場が生まれることになった。それは「単純労働、時間管理、低賃金」がワンセットになった働きかたとは別の可能性や、仕事と遊びの境界の再考へと我々を導くことになった。



③言葉と声とリズムから集団へと働きかけるワークショップ。講師が前に立ち指示するのではない。参加するメンバー本人たちがどうやりたいのか、その事を大事にしたものである。障害支

援施設の交流室に置かれたホワイトボードには、メンバーによるつぶやきや落書きが日々更新される。仕事の作業の合間に、フツとやってきては、付け加えられてゆくメッセージは、「あ！とんだ！」「仏の顔は一度まで」「私の心は真っ黒だ」など天気図のように変化していく。ワークショップでは、思い浮かぶコトバをノートに書きため、コトバのイメージをビートに乗せて確かめ、色付きマーカーでロール紙に書き写すという手順が進められた。小さなノートの隅に留まっていた文字が、他人にも読める大きな紙の上に書き移されることで、フレームも広がるようだ。次に録音した声を自分で聞き、メロディを加え、最後にマイクを持って人前で表現してみる。人前での表現がそれほど得意ではない彼らは、動きが固まり、言葉や声が出なくなる場面もあった。けれどマイクを通しリズム乗った声が、聞かれる言葉となる事で、視線が足元から皆の方へと少しずつ伸びていった。「スーパー・パート・クエスト」と題されたリックの作品で、向川貴大くんは、センターに来る以前に働いていたスーパーでの野菜担当の経験をユーモラスなリックに仕上げた。お母さんから聞いたところでは、売り場でトマトを並べるのが楽しくなり、お客さんの手がとどかないほどの高さにまできれいにピラミッド状に積み上げた事もあったらしい。店長からは彼をどう扱ったらよいのか解らないと言われ、その後は店の掃除の仕事ばかりさせられる事になったという。ただし、「最初の一步の仕事は戦場！」から始まる向川くんのリックには、体験を否定的にはではなく、与えられた環境でベストを尽くす意思が込められていた。コトバを引き出そうとするのではなく、そばに寄り添いながら変化が起こるのを待ち続ける講師やスタッフの方々の姿勢に支えられながら施設のメンバーのコトバたちは、生きたメロディとなっていった。



④環境から集団の身体へ働きかける「外からのベクトル」、個のコトバからコミュニティへという「内からのベクトル」、これら二つが交差する場としてパフォーマンスを開催した。観客と演者を区切る劇場など従来の公演の手法ではなく、障害者施設の空間全体を音響+照明+鏡面のインスタレーション+映像を用いて多面的に使用し、「観る／観られる」、「見る／看られる」という境界を越境する協同的な場の試みだ。プログラムでは、「人生の悩み」「自分には何もない」「老後が気になるお年頃」などユーモラスで、しみじみとして、爆発的なメンバーたちの発表の合間に、体がぶつかり合う、足場からジャンプする、たくさんの木の枝で会場みんなを繋ぐ協働パフォーマンスなど、多様な手法で介入するという方法が取られた。会場全体の観客とのキョリが少しずつ縮まり、最後のセンタースタッフによるエンディングソングでは、メンバーたちが様々なモノを抱えながら施設の中をパレード行進する見事なフィナーレとなった。また今回のパフォーマンスでは、「ケア」、「ヒップホップ」、「現代アート」という同席することが珍しい領域の観客が一同に会する出会いの場ともなった。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高橋 悟	4. 巻 63
2. 論文標題 CASE BY CASE BY GOODJOB	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤知久	4. 巻 201805
2. 論文標題 アーカイブを憎むなアーカイブになれ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 10+1（ウェブマガジン）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 悟	4. 巻 62
2. 論文標題 集団のアホーダンス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 133-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 4件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋 悟
2. 発表標題 感覚のアーキペラゴ：（脱）健常の芸術とその記録
3. 学会等名 昔の人の袖の香ぞする実行委員会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤知久
2. 発表標題 創造的 / ジェネティックなアーカイブの現在
3. 学会等名 慶應義塾大学アート・センター (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋 悟
2. 発表標題 映画上映と展示 「CASE BY CASE BY GOOD JOB
3. 学会等名 Good Jobセンター香芝、京都市立芸術大学
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 牧口千夏
2. 発表標題 ウィリアム・ケントリッジ《俺は俺ではない、あの馬も俺のではない》
3. 学会等名 京都国立近代美術
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 牧口千夏
2. 発表標題 展覧会企画構成 バウハウスへの応答
3. 学会等名 京都国立近代美術
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋 悟
2. 発表標題 集団のアホーダンス：Re-imagining others
3. 学会等名 アートミーツケア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋 悟
2. 発表標題 イノチとインセキ
3. 学会等名 福祉をかえるアート化セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧口千夏
2. 発表標題 コレクションから考える現代美術史
3. 学会等名 AMSEA2017（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋 悟
2. 発表標題 映画上映と展示：「Tracing Voices」
3. 学会等名 京都市立芸術大学
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧口千夏
2. 発表標題 企画構成報告：ベサン・ヒューズとアーティストトーク
3. 学会等名 京都国立近代美術館
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 知久  (satou tomohisa)  (70388213)	京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・教授   (24301)	
研究分担者	牧口 千夏  (makiguchi chinatsu)  (90443465)	独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館・学芸課・主任 研究員   (84302)	